「森銑三刈谷の会」だより 51(2026/4/18)

発行　2026/4/18（月刊・メールでの投稿歓迎）　　バックナンバー 刈谷市中央図書館＞森銑三刈谷の会
例会　第３土曜日 14:00-16:00 市中央図書館　参加自由　　共同代表 神谷磨利子・鈴木　哲 tetsu_s@katch.ne.jp

図：蕙齋 筆『諺画苑』部分, 文化５［1808］序. 国立国会図書館　デジタルコレクション（保護期間満了）

51:2026/3/21(土)　森銑三（1934 年）「黄表紙作家としての唐来三和」～『再会親子銭独楽』（寛政５年、出版つたや）を読もう　№.４、絵師・北尾政美（きたお・まさよし）　(参加 12 人)

浮世絵師・北尾政美から津山藩絵師・鍬形蕙齋へ

神谷　磨利子

青蚨の血筋を引いた子母銭のことから始まり、蜘蛛の糸ひくままに読み解く野馬台の詩に倣った一筆書きの「子母銭の賛」まで、『再会親子銭独楽』を読み終わった。毎回十余人で読んだからこそ、読み慣れない黄表紙の一語一語まで読むことができたと思う。

『再会親子銭独楽』は三種類の銭の、銭本来の働きと種々の使われ方とを示していた。森銑三は「読書日記」1923 年９月 10 日に「唐来三和の『再会親子銭独楽』、大いによし」「政美の挿画またよし。寛政５年（1793）の版行にて、『略画式』（1795）の絵にやや近づけるが見ゆるもなつかし」と書いている。

政美は 1794 年津山藩お抱えの絵師となる。その後鍬形蕙齋と改め『略画式』シリーズ、『諺畫苑』（1808）や「江戸一目図屏風」(1809)を描いている。銑三は『書物』（初出 19344 年）において、江戸で出来た絵本として「蕙齋の『略画式』以下数種の絵本のあることを特筆」している。加賀翠渓の加賀文庫や帝国図書館所蔵の善本を目にした故に見る力が養われたと推察する。

北尾政美 = 鍬形蕙斎、蕙斎(1808)『諺画苑』

鈴木　哲

唐来三和[作]・北尾政美[画](1973)読み終え、充実感を覚えた。北尾政美(1764-1824)が鍬形蕙斎と同一人物であることを初めて知った。北尾政美は NHK 大河(2025)『べらぼう～蔦重栄華乃夢噺～』に登場(高島豪志)し、鍬形蕙斎は『森銑三著作集』続編(1992-95)全 17 巻カバーに略画が使用されていて親しみがあった。

当日課題となった蕙斎(1808)『諺画苑』（コマ 4）［図］の諺の解読ができた。「我がゑひらくのかまたらい」である。日国に「わが家楽の釜盥」の立項があり、人情本・軒並娘八丈(1825)4-13 に「我が家楽の釜盥と、我が家ほど結構なものはない」があった。

「ゑひらく」は「いへらく」の誤りかと思っていたら、小学館(1982)『故事俗信ことわざ大辞典』に「我が家楽の釜盥」の転化に「我が栄楽の金盥」があり、「国字分類諺語」（幕末頃）に「我家楽の釜だらひわがゑいらくのかなたらいと誤る」とあるという。蕙斎(1808)が「栄楽の釜盥」であることは画から分かる。盥は手水舎の「盥漱」「漱盥」を連想させる。言葉は奥が深い。

終りと思えば物悲し　　飯田　芳子

『再会親子銭独楽』の資料として森銑三「鍬形蕙齋雑俎」『森銑三著作集』4 巻を提供された。「蕙齋の絵本は、諸種の略畫式に止めを指すが、なほ同性質のものに属する『諺畫苑』と題する一冊物を、三成重敬氏から示されて（中略）繰り返し見て飽くことを知らぬ」（p.321）とあった。絵本としての絵と、諺を絵解きした絵には開きがあり、此の『諺畫苑』の絵は軽妙で嫌味がない。紹介者の三成重敬は八雲の縁者で歴史学者である。

今回の黄表紙の中でどの絵が好みかとの質問に対しては、この様にお答えしたい。

今回の『再会親子銭独楽』の各場面の絵は頁ごとの内容にふさわしい情景が巧みに描かれ二つの物語（青蚨と三庄大夫）から成ったことを（14 のウは、１のウと２のウ)、(15 のオは２のウと３のオに）その物語の始めと最後を知る事ができる。その間は各場面を巧みな演出で黄表紙の面白さを堪能できるように描かれており、一冊の絵本としての完成度を備えている。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

予定

52：2026/04/18(土):2 階視聴覚室：「『再会親子銭独楽』を読もう」№.５、〈関連〉森三郎「めぐりあひ」『赤い鳥』(1934.8)

53：2026/05/16(土)：3 階第 1 会議室：「『再会親子銭独楽』を読もう」№6、David Dykes　〈関連〉坪内逍遥「十銭銀貨の来歴談」(1900)他/Joseph Addison "The Adventures of a Shilling" (1710)他

54：2026/6/20(土)：募集中、お申し出ください。